

臨床社会学の方法

(2) ガスライティング

中村 正

1. 映画『ガス燈』から

逸脱行動を正当化している加害者や行為者の言い訳の体系がある。動機や原因を垣間見ることのできる「内言」のように機能している。今回はそれを「暗黙理論」として位置づけて取り出し、加害者臨床の俎上にのせることが重要だと書いた。

加害の後押し理論のように機能している意味づけの体系は社会的に構成されたものであり、加害者が決して一人で考案したものではない。このことが社会臨床からすると重要である。何故なら、自らの動機を構成する意味の貯水池が社会のなかにどのようにしてあり、それをどんな具合に吸収して自らの行動を正当化させているのかについて知ることができ、社会の側の共犯性や暴力性も可視化されるからである。

また、この作業は、社会のもつ加害促進的な意識や態度の諸断片がどのようにして個人の行為として濃縮され、編成され、調査され

ていくのかその過程を劈開することにつながる。社会のなかのどんな要素が個人の行為次元で逸脱行動として統合されていくのかに関する理解をすすめることに「暗黙理論」は貢献する。その上で、加害者の意識や思考にあった、そうではない行動へと導く更生と保護はどうすれば可能なのかについて、それを加害者臨床として編み上げていくためにもこうした作業は有意義だと考える。まとめておこうである。「暗黙理論」は「逸脱の素人理論」ともいえ、加害者臨床や司法臨床の、そしてこの社会がもつ共犯性ともなる意味環境を可視化させることができ、加害者臨床の資源となる。当該個人の更生にとどまらない社会臨床の対象にもなると位置づけている。

ひきつづき同じように臨床社会学の言葉を紹介していきたい。今回は親密な非対称関係を念頭におき、それを息の詰まる関係性へと構成していく過程を扱うことのできる概念について考えていく。ガスライティングをとりあげる。これは被害者が自分を責めるように

仕向けるコントロール行動のことである。前回の「暗黙理論」を補完する行動でもあり、犠牲者批判や非難者非難の内実を成している。

ガスライティングとは、イングリッド・バーグマンがアカデミー主演女優賞を受賞した1944年の米国映画『ガス燈』に由来する。監督はジョージ・キューカー、出演は夫役にシャルル・ボワイエ、妻役がイングリッド・バーグマン。1940年の英国版もある。ちなみに双方が収められているDVDがでていいる。舞台でも上演されたという。マニピュレーション(心理操作)を犯罪に利用することを描いたサスペンス仕立ての映画である。

ガスライティングはこの映画の心理操作に由来して用いられるようになった。親密で非対称な関係がはらむ可能性のある、コントロールし、操作し、場合によっては洗脳と類似した事態が起こりえることを把握しようとした言葉である。長期にわたる監禁事件で被害者の無力化(学習性無力化)がおこるがそれにも近い。

2. 虐待・暴力を語る言葉のひとつとして

この言葉に最初にであったのは、訳出するものとしては二冊目になるカナダの心理学者、ドナルド・ダットン『虐待的パーソナリティ-親密な関係性における暴力とコントロールについての心理学』(中村正監訳・松井由佳訳、明石書店、2011年。原著は *Abusive Personality*, Guilford Press, 2006) を編んでいるときだった。

DV被害女性の特徴をとらえた「バタードウーマン症候群」という言葉があり、それを説明している箇所(第4章)で用いられている。「緊張が高まっていく段階では、息が詰まるような強い独占欲、言葉による説教、『ガスライティング』(すなわち、女性が現実をみる力を弱めること)または肉体を使った横暴な態度など、その男性が用いてきた虐待の形態が徐々に激化していく」とある。

続けて、「女性達は自身の怒りをぐっところえる。男性は反抗の兆候に対して非常に強く警戒するようになる。男性は自分が感じる怒りをかなり他者に投影することから、相手が怒りを表出していない場合でも、怒っていると誤解することがある。」と記されている。

日本の読者にはわかりにくいのでガスライティングに訳注を入れた。「狙われた人物の感覚喪失、妄想、悪評、トラブル等を捏造または演出する。その結果、そうした症状を呈することを訴えさせ、対象者の人格、性格、精神の障害を周囲が感じるように仕向ける。社会的評価を失墜させ、自信、自尊心及び評判を破壊し、対象者の人生をねらいどおりのレベルまで破滅させる。場合によっては自殺に追い込むことも可能である。そうした追い込みの総称を『ガスライティング』と呼ぶ。妻に妻自身が精神病だと思い込ませるストーリーの映画『ガス燈』(1944年)から命名されている」と。

3. 心理的に追いつめられる過程

さて映画は、紹介してきたように妻が心理

的に追いつめられ、自らを責め、病んでいく過程を描いている。モノクロ映画なので、霧の街ロンドンの陰影と妻の不安感が重なる。街灯にガスを点けてまわる点灯人、蹄鉄の音を響かせる馬車もヴィクトリア時代ロンドンを浮かび上がらせ、サスペンスの雰囲気盛り上げる。

心理的に追い込む夫の目的は妻の財産である。もちろんサスペンス映画としての解決はきちんとつけられているし、娯楽映画としても楽しめる。

ある日ハンドバックに入れたはずのブローチがなくなる。それは夫が隠したのだが。妻はさんざん探すのが当然見つからず、夫がくれた大切なものをなくしたと自分を責める。夫はやさしくいいよという。こうした出来事が頻発する。次第に自分の精神状態を疑い、夜ごとかすかに薄暗くなるガス燈の光も、天井から聞こえる不審な音も自分の心が不安定だからだと思うようになる。

ガス燈の炎が弱くなるのは、その時間、テラスハウス（数件が連棟になっているビクトリアンハウス）の別棟から屋根裏部屋に入り込んで妻の叔母が残した遺品のなかから宝石を探す夫がそこでガス燈を灯すとき、ガス管でつながった家のガスの出具合が瞬間的に弱くなり、ほの暗くなるからだ。しかしそれも妻の気のせいにされていく。天井から聞こえる不審な物音は夫の足音だが、それも妻の幻聴だとされてしまい、妻自身もそう思い込むようになっていく。

また別の日、部屋に飾ってあった絵が一枚なくなっていることに気づく。不思議に思っ

た妻が夫に尋ねるがはじめからなかったと言いきる。家政婦に聞いても要領を得ない。本当になかったのかと自分を疑いはじめる。

4. ガスライティングの特徴

こうして自分に自信がもてなくなり、精神のバランスを喪失していく。不安な心がつくられていく様子演技が迫真にせまる。「これは現実なのか、私はいったいどうなってしまったのか」と閉塞する問いが続く。自分の行動や精神状態に自信が持てなくなった妻は精神的に追い詰められ、正常な判断が出来なくなっていく。

ダットンはDVの被害者の心理的状态としてこのガスライティングを指摘していた。一般的には、親密な関係性と非対称な関係性、つまり逃れにくく、力の関係が支配し、特に訴求しあう関係があるところにおいてガスライティングは起こりやすい。そこでは自分が自分でなくなり、いつも相手のことを考えてしまう、びくびくした生活となり、現実感が喪失させられていく。親しい人から継続した暴力を受けてきた被害者の体験から話されることと重なる。

ガスライティングそれ自体の研究も蓄積されている。いろんな事例が紹介されている。たとえば、会社の同僚を家に招いてパーティを計画したが、夫は事前に参加者の好みを聞いており活きの良いサーモンを手に入れて焼いておくように妻に指示した。しかしその日に買い物にでかけた妻は養殖のサーモンしか手に入れることができなかった。愚かで思い

やりにかける妻だと彼は激怒した。しかもその同僚たちの前でだ。侮辱と屈辱、勝手な理由と論理の支配、彼の賞賛をもとに生きているような麻痺した感覚に陥ったと語る。

さらに一般化すれば、相手（被害者）に非があるように現実を定義し、構築していく狡猾な手法がこのガスライティングである。重要なことは、心理的な追いつめ行為が被害者の善意、特性そして役割を最大限に利用しているという点である。

映画では、妻の不安定な気持ちとなっている事態が利用されている。その詳細は観ていただくしかないのだが、直前の叔母の死、その叔母が殺された家に住むことの不安、その犯人はまだ見つかっていないこと、その後のイタリアへの音楽留学の失敗による失意、そこで会った一目惚れに近い男性（現在の夫）との結婚などである。不安でいっぱい若い女性が過呼吸状態となるような要因が複数存在しているといえはわかりやすいだろうか。そして、女性の愛情がガスライティングとして利用されていく。それらは、他者を思い、自己を省み、関係性を維持しようとする関係性志向の妻の意識に棹さしたものである。

妻は自問を続ける。考えすぎではないだろうか、敏感すぎるのではないだろうか、不安感のなせるわざなのか、やはり精神的に不調なのだろう、自分が少し我慢をしていればそれはそれで大事にならないのではないかなど。しかも夫はあんなにやさしくしてくれているのにと自責の念も高まる。

5. ガスライティングの効果

ガスライティングは、自分にとっての現実の定義が他者主導のなかでなされていくことである。たとえばDV加害男性は決まって「俺を怒らせるな」という。この言葉はガスライティング効果をもつ。

この言い方は次のような経過で作りだされる。「俺は悪くない。非はない。」という意識（否認の意識）と、「しかし現に妻は傷ついている。」ということは矛盾する。それを解消するために編み出された意識は「妻が私を殴らせたのだ。うるさくしつこく文句をいったからだ。」ということになる。それが「俺を怒らせるな。」という子どもじみた言い方になる。これは妻からすると「暴力の予告」である。

しかし、言われた側からすると、そのきっかけはわからない。「俺の感情にお前が責任を持て」といわれているに等しく、夫の感情や気分への配慮が頭を離れない。一種の心理的なのっとり、つまりマインドコントロールである。しかもそれが愛情や信頼、そして親密な関係性の証しとして意味づけられていく。従来型の女性役割（ジェンダー意識）や、子どもがいれば母役割の意識が動員される。こうして他者との関係性に生きることがあだになっていく。

これは「被害者の非難」（あいつに罪がある）の一種である。さらに、合理化（あいつをしつけようとしていただけだ）、虐待や暴力のつもりはないといいはる（故意ではない）、妻の応答に問題があるから矯正してやった（妻はヒステリックだ、過剰な反応だ、やりすぎだ、

言葉の暴力だ) などとして相手の現実を定義していく。狡猾さはこうした意識を養分にし、DV や虐待を正当化する。

ガスライティングの効果は次のような諸点にあるという。①いつも自分のことを二番目に考えるようになる、②感じすぎではないかと自問自答するようになる、③混乱している感じがする、④誰かにいつも謝っている、⑤よいことが起こっているのに幸福感をえられない、しかもその理由がわからない、⑥夫の行動を第三者に謝っていることが多い、⑦みずから説明したり謝罪したりする必要のないことをいつも抱えている、⑧現実が歪められていることをそうではないと自分にウソをつく、⑨何か単純なことを決められない、⑩本当はこんな人間ではなくもっと楽しい人間だと心のなかでは思っている、⑪希望や楽しみがないと思う、⑫自分は夫にとって満足のいく妻ではないのではないかと思っている、などという事態になってしまう。

(*The Gaslight Effect: How to Spot and Survive the Hidden Manipulations other people use to control your Life*, Robin Stern, Morgan Road Books, 2007, New York) .

6. 愛情への寄生としてのガスライティング

繰り返すがガスライティングは、非対称な関係性と親密な関係性が重なるところで起こりやすい。しかも、与える愛、配慮する思いやり、心配りするやさしさに根ざす。これは「愛情の搾取」である。私は「慮る行為に内

在する犠牲や献身の行為を利用した加害者の操作する暴力」と定義している。

ガスライティングを仕掛ける側 *gaslighter* は、むらのある行動、都合のよい愛情、相手にむかう関心の偏向、そして、まだらな愛情となっている。他方のガスライティングを仕掛けられる側 *gaslightee* がそのあいだを埋める努力をしてしまう。修復を志向し、改善を訴え、心ならずも自らの非さえをも認め、従属していく。怒らせるなという命令通りに、関係性の維持や改善にむけて行動する。

このガスライティング行為は寄生的な関係性となっている。相手を貪ることになり、共に益のある関係ではない。暴力や虐待への介入が必要な、重篤な事例だけではなく、長年にわたる、慢性的な寄生となることもあり、家庭内暴力の深刻さを物語る。

たとえば高齢期は夫婦二人の生活となる。「老害男性」とでもいうべき実態もこうしたことの延長線上にある。「夫原病」という言葉があり、高齢期の妻の不健康のもとに退職後の夫がなっていると指摘する(石蔵文信『夫原病-こんなアタシに誰がした』、大阪大学出版会、2011年)。

さらに深刻なのは孤立と孤独、病気と障害、不安のなかで、対人関係、融通がきかないなどというコミュニケーション問題である。

以前の研究ではあるが同じくショックな事例がある。「高い死亡リスクは夫のいる女性、妻のいない男性」という調査結果である。「女性にとって一番の“危険因子”は配偶者」という研究を愛媛大医学部の藤本弘一郎助手(公衆衛生学)グループがまとめた。調査は

松山市に近い宅地化の進む農村地区で実施された。60～84歳の全員4545人のうち、寝たきりや脳卒中、心臓病、がん、骨折経験者を除く3136人(男1326人、女1810人)を1996年から約4年半追跡した。亡くなった201人(男111人、女99人)の健康や生活、趣向などを分析、死亡につながるハイリスク因子を探った。その結果、高齢やADL(日常生活動作能力)の低下は、男女とも死亡につながる高い因子だった。さらに男性では「配偶者がいない」「糖尿病で治療」「たばこを吸う」「過去1年に入院」「過去1年に健診を受けていない」などがリスクに挙げられた。しかし女性では「配偶者がいる」がただ一つのリスクだった。このうち配偶者だけをみると、男性では「妻がいない」ために死亡につながるリスクは、「いる」に比べ1.79倍も高かった。一方、「夫がいる」女性のリスクは「いない人」に比べ55%も高く、女性にとって配偶者は“重い存在”であることを示したのである(『毎日新聞』2002年11月7日)。

7. ガスライティングに気づくこととのりこえること

ガスライティングは介入が必要な暴力に付随する事例からこうした慢性的な関係性の疲労の事例にまで広がる。

もう一つの事例として日本女性の「更年期」についても同じような関係性の疲労の影響が及んでいるという医療人類学者の研究書がある。

『更年期—日本女性が語るローカル・バイ

オロジー』(マーガレット・ロック、みすず書房、2005年)は「昭和—桁世代の女性の語り」に内在させて「更年期の体験」を浮かび上がらせた。「混乱期に生まれ、世界観の激変の中をひたむきに生きてきた女性たちの個人史、そしてあくまでその個人史と結びついた更年期の自覚症状の出現である」と著者はいう。

みえてきたのは、家族の世話を基本にして生きた昭和の家族のなかの女性たちひとりひとりの個人史である。「更年期障害」として医療化され、臨床化される症候群や一般的定義ではなく、「圧倒的に社会的なカテゴリなのである」と指摘する。更年期を、閉経以降の女性ホルモン「欠乏」と関連づける西洋医学的な概念である「メノポーズ」と同一視し、医療化する傾向を批判し、ある特定の文化でしか通用しない、しかも医療化された概念で人々の苦悩や人生を臨床化することの弊害を語る。

こうして体験を聴き、物語化し、記述することが重要であるとされる。人々の経験に即して問題を定義していくことが大切で、このガスライティングもたくさんの事例のもとに見えない暴力を浮かび上がらせたいと考える。そうすることで見えない暴力への対応が可能となる。

ガスライティングされる側への対処は、たとえば切断する愛を説く「タフラブ」という方向性の気持ちよさ(信田さよ子『タフラブという快刀』梧桐書院、2009年)、肯定的にNOを言うなどの自己主張が大切なことに気づかせてくれるアサーション的コミュニケー

ションの涵養、そして深刻な事態に陥る家庭内暴力被害者の社会的な孤立を防ぐ相談、防止そして介入の仕組みづくりなどたくさんある。つまり力をつけるタイプの支援の構築であり、女性のエンパワーメントと総称されるものである。

それと並行して、加害の側、ここではガスライティングを行うことの多い男性にはパワーシフトのアプローチとなる。他人を操作して生き、そこで自分を保つということは指摘したように寄生的な生き方である。ガスライティングを養分にした生活のもつ虚構性は自分にかえってくる。行く先には老害化する男性像が待っている。非対称な関係性のなかで自分より「弱い者」をコントロールして保たれる生活は心理的には脆い。さらに操作する相手に依存しているので、最終的には共に倒れることとなる。共同して生きていく関係性としては脆弱である。

多様なタイプの加害男性たちと関わっていると、虚勢としてのパワーに幻想を持っているので、それにかわる、力ではないものによる力づけの支えがいると思う事例が多い。まずはガスライティングに気づくことであるが、その直後に陥る脱力感はその男性性意識のなかでは無力さとして観念されるので、虚勢としての男らしさに代わる「つかえ棒」や「添え木」がいるということだ。私の加害者臨床では、吐露することやつながることを褒め称えることにしている。弱くなること、責任を認めること、支援をもとめること、妻や子どもが逃げていくことなどそれまでの彼らの男らしさからすると真逆の事態になってグルー

プワークや相談にやってくる。

そこで、そのことを受け止めることができていることは強いことであるし、男らしくもあり、潔いよいことでもあると共感し、それを承認する。

そのままでは男性たちはDV防止法、児童相談所、被害側弁護士をののしるだけである。制度批判をとおして怒りをだし、エネルギーにするか、無力感に苛まれ、うつ的になるか、自暴自棄的にアルコールやギャンブルや仕事に浸ることがある。そうではない選択肢としてこうした加害者臨床がくわわるとよい。「弱さの強さ」という逆説とそれを支えることが「寄生する自己」をつくりかえる起点となる。

8. サイレンシング silencing (沈黙させること) の一つとしてのガスライティング

このガスライティングは「加害者との同一化現象」ともいえる。他にも、部活における厳しい体罰によって選手が自らの能力を卑下して厳しい指導にさらに追従していくようになることも同じようなメカニズムである。虐待した親の言い分（虐待を引き起こさせた子ども自身の問題があるといい、子どもを責める）とも重なる。

ガスライティングが起こるところにはなんらかの非対称性と親密な関係性（親子、夫婦、師弟等の上下関係）が介在していることを指摘した。しかしそのパワーは「裸の王様状態」でしかない。賞賛し、服従する「弱者」がいなければ王様ではありえない。

社会臨床からすると、ガスライティングに気づくことが大切である。しかし、虐待、DV、いじめなどの事例について、身体への暴力だけではなく、ガスライティングのような心理操作による暴力を制度化して加害対策にしていくことは難易度が高い。こうした暴力は広くサイレンシング *silencing* と特徴づけることができ、人格攻撃、侮辱や蔑視、無視、自己否定への誘導などを伴う現象というより広い対人暴力の層を構成している。これらは沈黙を強いる行動である。

ガスライティングはこの一種である。暴力と虐待の形態には多様な内実があることの理解が大切である。家族という親密な関係性をもつ、葛藤、やりきれなさ、切ない努力や行き違いの錯綜であることのなかには意図しないガスライティングも含まれている。ここで紹介している言葉は社会を映す鏡でもあるが、それは窓でもある。そこからみえる風景は暴力や虐待という言葉の奥行きとして理解すべき事項がたくさんある。

紹介したように「更年期」という言葉に映ることは単に女性の閉経後の医療化された心身状態、つまり西洋医学化された障害としての更年期ではなく、「昭和の家族」を生きたひとりひとりの女性であった。それを窓としてみえてくる生きられた心身の姿がある。

「夫原病」も同じようにいえるだろう。臨床を表現する言葉の質量感、陰影そして深奥の理解には、科学性や普遍性の追求だけでは難しい。文化や芸術や宗教の言葉や感性とともに紡がれる、個々の体験を語る言葉が大切なのだろう。ガスライティングも同じように

心理的な操作という暴力を可視化させる窓となる。

また、別に詳述してとりあげようと思っている関係性の病理を語る臨床社会学の言葉は数多くあるが、たとえば第1に、ストックホルム症候群と呼ばれる事態がある。これはストックホルム銀行に強盗が入り、長時間監禁されていた女性行員が犯人の行動が激しくならないように同調的で理解する行動を取り、その結果、人質となった行員と犯人が後に結婚するほどに交流がすすんだ事例である。

第2に、モラルハラスメントである。身体的な虐待や暴力のように立証しにくい、人格非難や侮辱するなどの尊厳を冒す言葉や態度による暴力を意味する。

そして最後に、ガスライティングやこれら二つとは真逆の意味をあらわすモラルマゾヒズムがある。それは自己犠牲や献身の物語。これは相手に罪悪感を抱かせて関係をつなぎとめようとする心性と行動を意味する言葉である。日本の母性イメージに近い。

他にも日本語でいう「甘え」は受動攻撃性ともかかわる態度や心理状態を含んだ関係性を表現する言葉である。これらは、同じ関係性の拘束を意味するにしても、コントロール行動としては、単にパワーで押さえつけるというような分かりやすい暴力とは異なる様式となっている。

9. 暴力性の理解の広がりへ

ガスライティングからストックホルム症候群やモラルハラスメント、そしてモラルマゾ

ヒズムという連続性において心理と感情にかかわる関係性における暴力をみると、ある広がりの中かで問題を把握すべきことが理解できる。そうすると、暴力性の含意が、操作性や追従性、場合によっては自発的服従や献身と犠牲にまで広がることになる。その暴力性の中心には他者の自立と自律への干渉ならびに脅威があることが浮かび上がる。この点ではパターンリズムの強い文化を持つ日本社会における対人援助のあり方の吟味も重要となる。対人援助のもつ暴力性というテーマである。これらは別に紹介していきたい言葉である。

ここではガスライティングという手がかりをもとにしてそのことを考えてみた。暴力性の幅も相当に広いということの端緒を示したつもりである。ひきつづき類似の言葉を紹介していきたい。

(2013年8月25日受理)